

竹本屋五兵衛について

論文要旨

江戸時代中期から後期にかけて江戸で活躍した道具商である竹本屋は三代にわたり五兵衛を名乗った。祖父五兵衛は『古画備考』の記述から従来、英一蝶（一六五二―一七二四）との関係が中心に述べられてきた。また父孤雲は川上不白（一七一六―一八〇七）の門人である。さらに子の五兵衛は松平不昧（一七五一―一八一八）の茶会記に登場し、また『雲州藏帳』に所載される水指を取り次いでおり、茶の湯道具との関係も少ない。さらに五兵衛は江戸時代後期にも活躍したことが知れ、江戸の鳥羽屋に出入りしたことが知られている。

従来、竹本屋五兵衛は祖父が一蝶と親しくした点が触れられているに過ぎず、孤雲については井上如雪による『牡丹考』（一九九六）で紹介しているが、竹本屋の活動を明らかにしたものはない。

そこで本稿では『古画備考』の記述を起点として、竹本屋の三代にわたる活動を明らかにする。

キーワード【竹本屋五兵衛、竹本屋孤雲、英一蝶、古画備考、川上不白】

宮武慶之

一 はじめに

江戸時代中期から後期にかけて江戸で活躍した道具商は多くいる。このような道具商は優れた作品を美術品収集で著名な大名、富裕な商人、茶人に売却したことでその名をとどめているが、具体的な研究が進んでいるとは言い切れない。そのような江戸の道具商の一人である竹本屋五兵衛については従来、英一蝶（一六五二―一七二四）との関係が中心に述べられてきた。というのも狩野榮信（伊川院／一七七五―一八二八）の次男で、兄を養信（晴川院／一七九六―一八四六）とする朝岡興禎（一八〇〇―一八五六）による『古画備考』中、英一蝶についての項目の後半は文政九年（一八二六）に孫にあたる竹本屋五兵衛の口述によるからである。¹なお本稿では三代にわたる五兵衛のうち初代を祖父とし、二代五兵衛が孤雲を名乗

つたことからそのように表記し、三代五兵衛を単に五兵衛と表記する。

『古画備考』によれば祖父が道具商であり、安永六年（一七〇九）に三宅島から江戸に戻った一蝶の世話をし、父孤雲も幼少の頃に面識があつたとされる。特に幕末に活躍した五兵衛については松平不味（一七五一—一八一八）の茶会記に登場し、また『雲州蔵帳』に所載される水指を取り次いでおり、茶の湯道具との関係も少なくない。

ところで高橋箒庵（義雄／一八六一—一九三七）による『近世道具移動史』（一九二九）には次のような記述がある。

武本五兵衛は伏見屋理兵衛と共に仙波太郎兵衛、鳥羽屋清左衛門両家に入居して居たので、是れも一廉の道具屋として知られて居た。

五兵衛と、かつて不味に出入りした江戸の有力な道具商である伏見屋甚右衛門（亀田宗振／生没年不詳）の番頭である伏見屋理兵衛（生没年不詳）とが、やはり江戸の豪商仙波氏や鳥羽屋に出入りしていたことが述べられている。伏見屋理兵衛が活躍した時期から江戸時代後期のことを考えられ、その頃に竹本屋は江戸で有力な道具商の一人としてみなされていたことがわかる。

従来、竹本屋五兵衛は祖父が一蝶と親しくした点が触れられてい

るに過ぎず、その活動は明らかにされていない。孤雲については井上如雪による『牡丹考』（一九九六）で、紹介しているが、その活動を明らかにしたものではない。⁽³⁾

以上の点から本稿では江戸時代中期から後期にかけて活躍した竹本屋の活動について論じることとする。

二 祖父および父の五兵衛

1 祖父五兵衛

冒頭でも紹介した通り、『古画備考』には竹本屋五兵衛により文政九年二月八日の口述がある。英一蝶に関して竹本屋では五兵衛の祖父や父より伝聞が伝わっており、一蝶が三宅島に在島中の出来事や横谷宗眠（二六七〇—一七三三）の事柄のほかに次のような既述がある。

一蝶御赦免ありて帰りし後、私祖父名五兵衛世話致候て、近所深川靈巖寺門前に宅を求候て、そこに一蝶を住はせ候由、自宅は六軒堀にて道具商売致居候へども、殊之外のあい口にて、毎日一蝶の方へ参り咄し居候由

五兵衛の祖父は五兵衛（生没年不詳）を名乗り、宝永六年に一蝶が遠島から戻った際には、霊岸島門前に宅を求めて住まわしていたこ

とが述べられる。すなわちそれ以前からの親交があつたと考えられる。この点を考えるにあたり遠島中の一蝶は江戸から送られる絵の具や紙を用いて絵を描いては弟子の英一舟（一六九八—一七六八）に送り、江戸で絵を売り捌いていた。この商売に五兵衛の仲介もしくは販売の形で関与していたものと推測される。また祖父五兵衛は六軒堀で道具売買を行ない、頻繁に一蝶の元を訪れていたことがわかる。

また祖父五兵衛に関する記述では次がある。

右の深川の宅もとめ候まで、五兵衛自分の菩提所、宜雲寺宜の奥の方に、隠居住れし所の、明きたる座敷有しかば、そこへ暫くの内かり候て、一蝶寓居せしなり、和尚へ五兵衛すゝめて、此逗留中にふすま等かゝせ候

一蝶が深川の宅を求めるまでの間、五兵衛は自身の菩提寺である宜雲寺の奥の方に隠居していたようである。五兵衛が隠居していた屋敷の空き部屋に寄寓し、五兵衛が和尚に提案し、一蝶に襖などに絵を描いたようである。この時期を宝永六年から数年の間とすれば、この時期に隠居していた五兵衛は相当な老年であつたことがわかる。一蝶への作画については帰島後、依頼が多かつたようである。この点について『古画備考』では次のような記述がある。

一蝶自分の宅へ帰りし後、ますく絵を求る者多く、諸侯等より厚き幣物を贈り、さまざまの絵頼有しか共、氣にむかざれば、いつまでも捨置書ざりしかば、家内の者より五兵衛方へ密に其事を告候て、何とぞ筆をとらせ候様、計策頼候由申來候へば、其時五兵衛參候て、其頃諸侯より頼來候絵様をかねて聞置、さて何々の絵図は、つひに見たる事無し之いかゞ致たる図に候哉と申時、幸此節外よりも其図を頼参りたれば、いま書て見申さんとて、筆硯をとりよせ候へば、か様く咄しながら画て見せ候由、誂人の絵忽ち出來せしと也

大名などからも一蝶への作画依頼は多かつたようであるが、一蝶は氣の乗らないときは筆を持たない性分であつたようである。そのため一蝶の家の者（妻もしくは家人）から五兵衛に密かに相談があつた。後日、五兵衛があらかじめ施主の依頼する絵の構図を聞いておき、一蝶の元に赴いた際には、施主から依頼された絵の構図であることは伏せ、この構図の絵をみたことがないという、一蝶が筆をとつたという。これによつてたちまち依頼されていた絵は完成したとのである。このあたりにも祖父五兵衛が人心を巧みにする人物であつたことが窺われる。

2 父、五兵衛（号孤雲）

『古画備考』には五兵衛の父についても次のような記述がある。

親孤雲、幼少なるをつれて参候時、帰りには何何か絵一枚書てくれ候由、道具屋の鼠屋某、五兵衛方へ来り、例の絵はたまり申さずやと問、何枚にても一枚二付銀十匁の定めにて買候由、或時澤庵和尚の画のうつしをば、これは珍敷絵に候とて、これ計りは、百疋置候由

この記述から五兵衛の父が孤雲（没年不詳）であることがわかる。祖父五兵衛が孤雲を連れて一蝶のもとに行くとき必ず絵を一枚描いてくれたそうである。一蝶が幼い孤雲に描き与えた絵が溜まった頃に、鼠屋某が一枚につき銀十匁の定めで買い取ったことが述べられる。また一蝶の描いた絵に澤庵宗彭（一五七三—一六四五）の絵の写しがあり、本品のみは珍しいので百疋を支払ったという。

この時期は一蝶帰島後の出来事であるため、宝永六年から享保年間（一七一六—一七三六）の初期ごろのことと考えられ、孤雲の生年もそれ以前の数年と判断される。

ところで現在、五島美術館が所蔵する長次郎作赤染茶碗「夕暮」（図1）には川上太白（一七一九—一八〇七）による次のような添状が付属する（図2）。

此問者御茶之儀如何御座候哉
且又此赤茶碗竹本出し申候

餘り全く珍敷物故入御覽度
奉存候、此問中便り無御座今日
幸の事故差上申候、大そう成ル
物故宜便り、先入御覽申候 以上
十月十一日 川上太白
（宛名切取）

本碗を竹本が取り出したことが知れる内容である。この竹本とは時期から考えて祖父五兵衛であるとは考えにくい。そこで『古今茶人系譜』によれば太白の門人として竹本屋孤雲の名が確認でき、同人と判断される。太白との関係から、孤雲は茶の湯道具にも関心を有したようである。というのも文政十年（一八二七）五月から文政十一年一月まで、山田宗閑（生没年不詳）からの口授である『茶道一与花』格九四には次のような記述がある。

随流作茶杓無類という名物有、夫を如心写して随流無類写と書入、不白これを写して随流無類写又写と書し三作実二無類の出来物之、此又写此宗閑所持、如心写此道具屋竹本五兵衛並木町孤雲ト云方にあり、随流作此或御旗本に御所蔵のよし⁴

随流斎（一六六〇—一七〇一）による自作茶杓銘「無類」は部分的に胡麻の入った竹で、權先を穏やかに尖らせた作である。共筒であ

(4)

り、栓には方印を捺し、随流齋による墨書で「無類 不審庵」とある。本茶杓を如心齋（一七〇六一一七五二）が写した無類写、さらには不白が写した無類又写があったことが知れる。如心齋による無類写を孤雲が所持していたことが述べられる。このことは茶の湯を不白に学んだこととも大きく関係していると考えられる。さらに祖父の代には江戸の六間堀に居たが、孤雲の代には浅草並木町にいたことがわかる。

孤雲が参会した不白の茶会については天明二年（一七八二）に行つた利休二百年遠忌の百回茶会記では、同年三月二十三日に竹本孤雲、同五兵衛の親子に加え、伊勢屋治兵衛（生没年不詳）が招かれていることがわかる。⁽⁵⁾ さらに同年七月三日には青地宗三郎（生没年不詳）、高屋左平次（生没年不詳）、松本一郎兵衛（生没年不詳）、竹本孤雲の名が確認でき、孤雲は詰をしている。また先述の『牡丹考』によれば不白による茶会への参会では明和三年（一七六六）四月二十九日、年次不詳十二月八日が確認できる。⁽⁶⁾

以上の点から孤雲は不白と親しくしたが、子の五兵衛も不白と親しくしていたことが確認できる。

三 五兵衛

このような祖父の代から道具商として、そして父の代から不白に茶の湯を学んだ環境にあった五兵衛について注目する。

狂言作者である伊勢屋宗三郎（一七八四—一八五六）による『貴賤上下考』で「道具屋定七」について次のような記述がある。

茅場町植木店に和泉屋定七といふ者、後に唐物やとなり、本室^{屋か}、伏見屋、竹本、上勝、柴田などいふ唐物屋と同席する程の大小のと成り、葉研堀同朋町に居て道具市などして、世人の知る者なり、上州の産にて是迄出世したりしが、文化の年雪の日、若松町の湯屋にて頓死す⁽⁷⁾

当時の江戸の有力な唐物を扱う道具商としては、時代から考えて、松平不昧の元に入りしていた人物らと考えられ、該当する人物としては順に木屋惣吉（了我／一七五三年⁽⁸⁾生）、伏見屋甚兵衛（生没年不詳）、竹本五兵衛（生没年不詳）、上総屋勝右衛門（生没年不詳）、柴田とあるが柴田傳右衛門（生没年不詳）のことと考えられる。また和泉屋定七（生没年不詳）も匹敵する人物であったことが述べられている。この点から江戸時代後期の遅くとも文化年間の時点で竹本屋は江戸の道具商として相当の地位を確立していたことが確認できる。

先述した長次郎作赤楽茶碗「夕暮」には、本碗の譲渡に際しての証文が付属しており次のような記述がある。

覚

印

一、金百両 長次郎造赤茶碗

宗旦銘夕暮号

名書同断

上箱覚々齋

不白手紙

外題 了泉

了意

本田伊豫守殿書付

メ

印

右之通代金槌に請取候 以上

子二月二十三日 竹本屋

五兵衛 印

川上様

『大正名器鑑』で編者の箒庵は本証文の宛名にある川上様とは不白のこととしている。⁹⁾しかしながら本碗を収納する箱は千宗旦(一五七八—一六五八)、外箱は表千家六代千宗左(覚々齋/一六七八—一七三〇)、総箱は川上宗寿(一七七九—一八四四)による墨書がある。そのため宛名にある川上様を不白に宛てた書状であるとする

ならば、文中に不白手紙と書くことは不自然である。これらの点を考え合わせると、当初より付属していたと考える方が妥当であり、覚書にある川上氏とは川上宗寿のことを指すものと判断される。すなわち本碗は、父孤雲が見出した作品であり、その後、息子の五兵衛が再び扱い、さらに宗寿の仲介により何処かへ所有移転していると考えられる。

以上のような川上家との関係の中で、父孤雲とともに五兵衛も関係したようである。というのも池内光風(生没年不詳)による『茶学撮要』がある。これは池内光風が川上宗雪(一七三八—一八二二)に問答した記録である。同書の「宗匠嘸」には次のような記述がある。

宗匠の嘸ヲ承リニ、此度、竹本ヤ五兵衛上方へ帰着致候而、其嘸ヲ聞クニ上方ノ茶器多キ事申中々所々無之、又其中染付ケナト就中多ク所持致シ候者有リ、竹本屋一日右ノ方へ染付見申度旨ヲ申入候処、明日□恭所招候テ見ス可キ旨ニテ、其当日罷越候処、染付ノ茶器斗リ長持ニテ十三棹ホト有之、中々見ル事モ出来ナク候而、竹本モ是ニ惟驚人候トテ、其咄候、旨宗匠上申候能、左スレハ又上方ハ染付類一入多ク有ル事トキ古ユ¹⁰⁾

時期から考えて孤雲の子である五兵衛のことを指す。上方には染付の道具が多く、その見聞を広める上洛であったことが知れる。現時

点で五兵衛の茶会記を確認できていないが、書画以外にも多くの道具に関係していることがわかる。

五兵衛で重要なことは不味にも出入りしたことである。不味の収集品の蔵帳である『雲州蔵帳』には「不識小人島水指 箱宗乾」とあり、現存の確認はできていないが、作品名から類推すると、小ぶりな不識の形をした水指と考えられる。本水指について蔵帳での記載では冬木、雪川を経て不味が竹本屋五兵衛より百両で購入している。すなわち本品は冬木屋上田家が所蔵した水指である。この伝来に注目すると江戸深川の材木商冬木屋が所持したのち、不味の弟である松平雪川（一七五三—一八〇三）が所持していたことが知れる。そこで雪川と五兵衛の關係に注目すると、雪川が不味に宛てた消息が『日本美術工藝（一八三号）』で紹介され、次のような記述がある。

江戸表の様子は定めて伏甚など言上仕るべく候、一向道具は之無く候、竹五又々上京仕候、利右衛門も上京の趣之を相聞き候、此様子なども御聞き遊ばさるべく候⁽¹⁾

五兵衛は、竹本屋五兵衛を略した竹五の名前で登場しており交流が確認できる。また五兵衛は数回上京していたようであり、先述のように染付などの道具に関する見聞を広めていったものと考えられる。

不味の茶会記中、五兵衛は二回招かれたとされるが、一回目は寛

政十二年（一八〇〇）十月二十三日で、永井大和守（直方／一七八二—一八二五）、竹本⁽⁷⁾五兵衛、炭屋助八（生没年不詳）である。二回目は文化八年三月五日に行われた不味の還暦茶会に永井大和守、竹本屋五兵衛、柴田傳右衛門（生没年不詳）の三名が招かれている⁽¹²⁾。不味の茶会では永井直方と同席しており、当時、五兵衛と交流があったものと考えられる。これらの点から五兵衛は不味、雪川の兄弟に出入りしていたことが確認できる。

五兵衛の活動の拠点であるが、現在、静嘉堂文庫美術館が所蔵する藤村庸軒（一六一三—一六九九）による茶杓「梅曆」の総箱は江戸時代の飛脚便の箱を用いたものであり、箱甲の宛名には「江戸浅草御蔵前三好町 竹本屋五兵衛様 書状入」とある。本作品はのちに鳥羽屋寿星軒が入手する。入手の時期は江戸時代後期である。そのため本箱にある住所は五兵衛の拠点と目され、江戸浅草御蔵前三好町に住居もしくは店舗を構えたことが知れる。

不味の近侍した人物として吉村観阿（白醉庵／一七六五—一八四八）や本屋了我がいる。そこで現在、個人が所蔵する不味が観阿に宛てた消息中には次のような記述がある。

一、信楽水さし、竹本、本惣、事呼二遣見せ候處未見せ不申也、御聞可被求候、右の事斗二候、晩ほと御出の上宜御話可被成候

最近、不味が信楽の水指を手に入れた。出入りの道具商である竹本

屋五兵衛や本屋惣吉にも使いをやつて見せようと思つたが、まだ見せておらず。観阿の意見を伺いたい。このことばかり気を取られており、今晚、出座を願いたいの内容である。本消息から当時の観阿の立場がわかるとともに、不昧の道具収集に関し、その所見を求め人物が観阿、五兵衛、了我であつたことが知れる。

なお五兵衛の所藏品について観阿の言動をまとめた『白酔庵筆記』には次のような記述がある。

竹本五郎兵衛五と申仁の所持品に青井戸の茶碗あり。是は二百五十両にて買置けるを、或夜盜賊忍入り水屋にありし右茶碗を目に付けず、却て其傍なる錫の中次を盗去りしとなん。扱ても眼明かぬ泥棒なる哉と打笑ひけり。⁽¹³⁾

竹本五郎兵衛とあるが、観阿との関係から考え竹本屋五兵衛のことと判断される。また当時の五兵衛が青井戸茶碗を所有し、水屋があることはすなわち茶会のために茶席がある家であつたことがわかり、三好町もしくは別宅にあつたものと判断される。

その後の五兵衛の活動で注目できる点は住吉廣行（一七五五—一八一）より住吉廣賢（一八三五—一八八三）までの五代にわたる鑑定記録である『住吉家鑑定控』⁽¹⁴⁾から五兵衛が多くの作品を鑑定に持ち込んでいることである。それらの作品を一覧としたものが表1である。文化十五年以降文政年間中、多くの作品を持ち込んでいる

ことが確認できる。この点から茶の湯道具以外にも書画を多く扱つたことが知れる。その時期は不昧の晩年から没後にかけてのことであり、当時の竹本屋の活動を考える上でも重要である。このような事例では現在、東京藝術大学大学美術館および、東京国立博物館所蔵する模本のうち、五兵衛に関係する作品では次がある。

- ・松花堂昭乗「鬪猫」（模本 本紙）東京藝術大学大学美術館所蔵
- 「文政九丙戌年二月十五日栄博写 竹本五兵衛ヨリ来」⁽¹⁵⁾
- ・松花堂昭乗「定家像」（模本 本紙）東京藝術大学大学美術館所蔵

- ・「竹本屋□兵衛来 絹文政十丁亥年六月十七日写□印通笹山」⁽¹⁶⁾
- ・「能恵法師絵詞」（模本 奥書）東京国立博物館所蔵
- 「文政二年十一月十八日 画亀吉摹 詞信義摹 右一軸詞書寂蓮法師筆申伝 絵粟田口・法眼筆申伝 竹本屋五兵衛ヨリ来」⁽¹⁷⁾

当時、これらの作品を五兵衛が持ち込んでおり、書画に関心の高い人物であつたこと考えられる。

四 むすび

竹本屋は祖父の代から道具売買を行い、一蝶などと親しくしたことでその眷属および英派と呼ばれる人々との交流が当然考えられ、

絵画に関する見識の高まりを示している。父孤雲は幼い頃より一蝶と面識があり、さらに後年は不白の門人として活躍した。また長次郎作銘「夕暮」の売買に関係するなど、茶の湯道具にも関係していることが確認できる。

五兵衛は不白の茶会に招かれており、当時の竹本屋は書画と茶の湯道具を扱った道具商であった。竹本屋の三代にわたる活動の拠点は、祖父の代では六間堀、父の代では並木町、五兵衛の代では三好町に移転していることがわかった。

特に江戸時代後期の五兵衛については、住吉家の記録中、鑑定のために持ち込んだ作品の記録が残り、早いものでは文化十五年が確認できるが、やはりそれ以前から書画に関心があったと考えられる。これは祖父が一蝶と親しくし、さらに孤雲も書画を商った家庭の環境が大きく影響している。五兵衛の活躍した時代、住吉家に持ち込んだ作品は絵巻や仏画などもあり、茶の湯道具以外の書画についても扱いがあった。

不味との関係では水指一件を取り次いだことが確認できた。ただ観阿や了我が不味の茶会に呼ばれた回数を『松平不味伝(中巻)』で見ると観阿四十回、本屋惣吉三十八回、息子の了芸(藤吉/生没年不詳)一〇回、本屋了我十七回となり、惣吉を了我と同一人として換算すれば、その回数は五十五回となる。一方で竹本屋五兵衛はわずかに二回であり、その回数差は歴然としている。⁽¹⁸⁾ただ、五兵衛に関しては後年、書画に関する記録があることから、不味と交流

していた時期にも、やはり五兵衛の所見や取引では書画に関するものがあつたと想像される。その後、五兵衛は鳥羽屋といった富裕な商人に出入りし、販路を拡大していった。特に川上宗寿や鳥羽屋道樹とは茶会での同席が確認できる。今後は五兵衛を取り巻く人物や大名の道具収集との関係をさらに詳しくする必要がある。

謝辞

調査にご協力いただきました静嘉堂文庫美術館、五島美術館、慶應義塾図書館、同志社大学図書館に深謝申し上げます。

註

- (1) 朝岡興禎著、太田謹補『古画備考』下巻、思文閣、一九七〇年、一九四七—一九四九頁。
- (2) 高橋箒庵『近世道具移動史』慶文堂書店、一九二九年、一五頁。
- (3) 井上如雪『牡丹考』此君楼、一九九六年、三五頁。
- (4) 前掲注(3)。井上如雪『牡丹考』三五頁より再引用。
- (5) 草間直方著、永島福太郎監修、原田伴彦校閲『茶器名物図彙』下巻、文彩社、一九七六年、五八九および六一二頁。
- (6) 前掲注(3)。井上如雪『牡丹考』三七—四〇頁。
- (7) 『貴賤上下考』三田村鳶魚編『未刊隨筆百種』第十卷所収、一九七七年、一六〇頁。
- (8) 宮武慶之「江戸の道具商・本惣―了我、了芸の活動に注目して―」『日本研究』第五九集、国際日本文化研究センター、二〇一九年、三七—六二頁。
- (9) 高橋義雄編『大正名器鑑』第九編、大正名器鑑編纂所、一九二二

- 年、六五―六七頁。
- (10) 前掲注(3)。井上如雪『牡丹考』。三五―三六頁。
- (11) 『日本美術工藝』日本美術工藝社、通号一八七、一九五四年、四一頁。
- (12) 茶會記については米澤義光『松平不味公(大圓菴)二百回忌記念茶會記集成』(能登印刷出版部、二〇一八年)を参照した。
- (13) 忘我逸人「白酔庵数寄物語(続)」『名家談叢』十六号、談叢社、一八九六年。
- (14) 『住吉家鑑定控』は『美術研究』で一九三五年二月から四月にかけて紹介された。
- (15) 東京芸術大学美術館編『東京芸術大学美術館蔵品目録』東洋画模本Ⅲ、東京芸術大学美術館、一九九九年、八一頁。
- (16) 東京芸術大学美術館編『東京芸術大学美術館蔵品目録』東洋画模本Ⅱ、東京芸術大学美術館、一九九九年、四四頁。
- (17) 小松茂美編『能恵法師絵詞 福富草紙 百鬼夜行絵巻』、中央公論社、一九七九年、一〇三頁。
- (18) 松平家編輯部編『松平不味伝』中巻、帚文社、一九一七年、一五七―一五九頁。

ENGLISH SUMMARY

On Takemotoya Gohei, Late-Edo Art Dealer

MIYATAKE Yoshiyuki

An art dealer who was active in Edo from the middle to the late Edo period. *Takemotoya* was named *Gohei* for three generations. The grandfather *Gohei* has traditionally described the relationship with *Ichou Hanabusa* (1652-1724) from the description of “*Kogabikou*”. Father *Kou'n* is a disciple

of *Fuhaku Karakami* (1716-1807). *Gohei* appeared in the tea ceremony of *Fumai Matsudaira* (1751-1818), and he is vaguely selling a *Kojimabito mizusashi*. *Gohei* was active in the late Edo period, and *Tobuya* was a customer. *Takemotoya Gohei* is only known for his grandfather's friendship with *Ichou*. *Gohei* is introduced in “*Botankou*” by *Joetsu Inoue*. The research so far has not revealed the activities of *Takemotoya*. Therefore, in this paper, we will clarify the activities of *Takemotoya* for three generations, starting with the description of “*Kogabikou*”.

Key Words: Takemotoya Gohei, Takemotoya Kou'n, Hanabusa Ichou, Kogabikou, Kawakami Fuhaku

表1 『住吉家鑑定控』にみる竹本屋が持ち込んだ作品

日時	作品名等	作者
文化十五年四月二十一日	団扇形松躑躅之画 一鋪	土佐光吉
文政元年十二月六日	雉之絵 一鋪	土佐光茂
文政二年閏四月二十一日	少女靠脇息之図 一鋪	土佐光吉
文政二年七月十二日	紅顔梨色阿弥陀尊 一鋪	巨勢行忠
文政二年九月六日	孔雀鳳凰 二幅対	巨勢有康
文政二年十一月二十一日	佛絵十一体 一鋪	土佐光輔
文政二年十一月二十一日	善導大師之影 一鋪	備後守光國
文政二年十二月六日	矜羯羅童子 一鋪	土佐光弘
文政二年十二月六日	墨絵源氏	土佐光則
文政二年十二月六日	求聞持之尊影 一鋪	大藏少輔行秀
文政二年十二月二十一日	物語絵残歛 一鋪	左近衛将監行長
文政二年十二月二十一日	草花 二幅対	土佐光元
文政三年二月二十一日	信明朝臣 一鋪	藤原信實
文政三年十月六日	来迎三尊	越前守光正
文政三年十一月六日	墨絵源氏小色紙 六十枚	土佐光成
文政三年十二月六日	十三佛	法眼源尊
文政四年二月二十一日	地藏尊 一鋪	宅磨為遠
文政四年二月二十一日	不動尊二童子 一鋪	越前守長隆
文政四年三月二十一日	理趣会絵巻 但草稿 一軸	法眼圓伊
文政四年五月二十一日	武者絵 二幅対	足利義持
文政四年七月六日	中阿弥陀左右二十五菩薩	中)宅磨為遠 左右)法眼尊海
文政四年七月六日	古肖像二体 一鋪	土佐光輔
文政四年九月六日	時代不同歌合巻物	宗軒
文政四年十月六日	釈迦三尊	土佐光重
文政五年正月二十一日	三幅神之絵 一鋪	土佐光吉

文政五年二月六日	十牛図 一鋪	越前守長章
文政五年六月二十一日	不動尊二童子 一鋪	巨勢弘高
文政五年七月六日	星曼荼羅之絵 一鋪	高野大師
文政五年七月六日	地藏菩薩 一鋪	法眼源慶
文政五年九月六日	愛染王 一鋪	巨勢有康
文政六年九月二十一日	十二天 十二鋪	宅磨良賀
文政九年五月二十一日	寿老人之絵 一鋪	
文政九年六月六日	繫馬之絵 十二枚	土佐光茂
文政十年六月二十一日	二枚折源氏絵屏風 ふちはかま 片シ	土佐光茂
文政十一年六月六日	靈照女之絵 一鋪	土佐光元



图1 長次郎作赤楽茶碗「夕暮」
(五島美術館蔵)

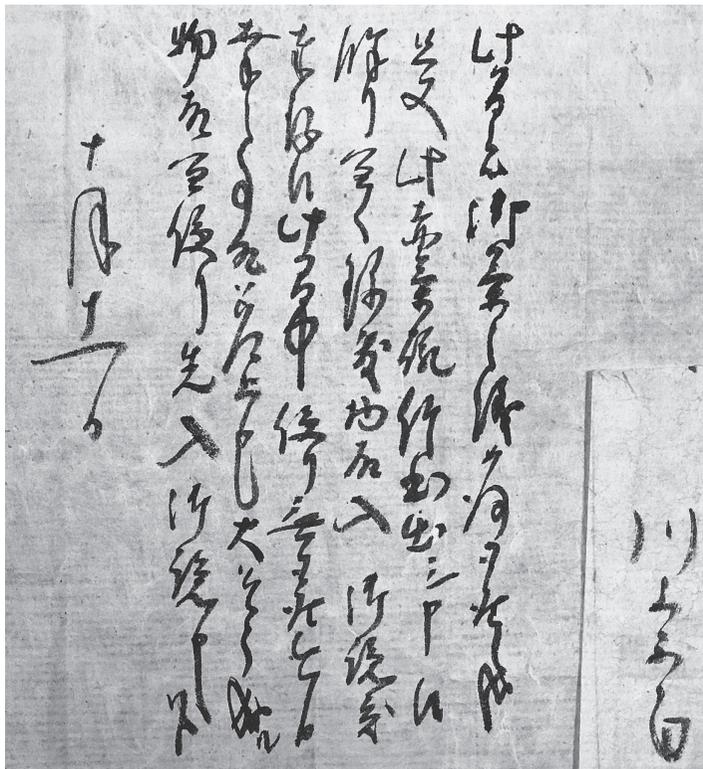


图2 付属する添状
(五島美術館蔵)